柏木隆雄

早速「春―夏の夢」拝読しました。何よりも美しい写真が実にうまく詩の世界が溶け合っているのに、驚きました。

「箜篌」が出てくる作品は、そういう古代の楽器をうまくイメージとしてとらえていると思いますが、李賀の有名な「箜篌引」と、それを見事な筆跡で写した会津八一の書跡*を思い起こした次第です。大鐘さんの詩的世界は広いのですね。以前頂戴した『森の囁き』でもそうですが、大鐘さんが蓄えている知的なものと、心の感性が、同時に響きあって、独自の詩的世界を創造しているように思います。それにしても西欧的（というかギリシャから中近と）そして日本的世界とが、箜篌というオリエントの楽器が中国にわたり、さらに韓国を経て日本にくるのを最初のイメージとして、以下ギリシャの神殿跡やサッフォーなど、見事に一つの遥かな時空を貫く詩想が、美しい写真と共鳴を起こしているように思いました。

そして以上のことは日本語の詩を拝読して思うことですが、これを翻訳というよりは、新しいフランス語での作品で表すというような離れ業は、まことに驚くべき才能で、ひたすら「恐れ入りました！」と言うほかありません。

以前のパロディと言い、豊かな才能に羨望せざるを得ません。

大阪大学名誉教授

*会津八一の書跡はこのファイルの最後にあります。

古屋健三

閉じこもりを強いられているので、書きたいものとじっくり取り組んでおられるとのこと、充実した時間をお過ごしでお慶び申し上げます。その成果であるご近詠を読ませていただきましたが、これまでとは一変した境地を目指しておられる印象を受けました。一言で言って仕舞えば、昨日までしつこくこだわってきた自我をガラリと脱ぎ捨て、普遍に昇華したいと身悶えしているようにみえました。

近代文学がこせこせとこだわり続けてきた己や身体感覚をかなぐりすてて、現代文学が問題にしている集合体、宇宙と理知的に向き合っていこうとしていると見受けられました。しかも一気にその淵源、生成の源に遡ろうとされておられるようで、それに応じて、波とか流れとか、闇とかその果てにまたたく光とか、長い歩みの末に、原初の光景が熱く喚起されます。具体的にはギリシアとか中近東の乾いた地がイメージされているようですが、ここはご研究のフローベール のアフリカの灼熱した太陽への憧れが反映しているのでしょうね。

かつては垂涎の的だったフランスが、今や血肉と化し、身についたフランス語が日本語と両翼をなして天高く天掛ける雄姿はみものです。まさに、知の権化そのもので、ご近影を拝見していると、お美しさに威厳が備わり成熟した女性の輝きを発して眩しい限りです。お会

いできる日を楽しみにしていますが、まずは脱皮され、大人になられたことを心よりお慶び申し上げます。お元気で。 六月二十八日

『三田文学』元編集長・慶應義塾大学名誉教授・作家

大鐘敦子の詩について

野村喜和夫

大鐘敦子の詩は古風である。時代を超えているといったほうが正確かもしれない。作品がまとう時代の衣装は、たしかに移ろいやすく、昨日の様式は今日のそれではない。ならばそんなものは最初から脱ぎ捨ててしまえとばかりに、大鐘さんは、最小限の摩滅しえない語彙を選び、シンプルでゆるぎない語法を組んで作品を構成し、たとえばサフォーが生きていた頃の、澄んで静謐な古代の空間へと想像力を飛翔させる。

いや、それは私たちのはるかな未来かもしれない。大鐘さんが好んで取り上げる砂漠、廃墟、雪原。それらはいずれも、タブラ・ラサの光景だ。そこにすべては流れ込み、終息し、しかしまたそこからすべてが始まりうるのだ。

「朱あかと／地平に沈む夕陽に／神々の黄昏がはじまる／まだ人が見たことのない次元の／大気に満ちて」（「神々の黄昏」）、

あるいは、

「ただ懐かしさだけが／たおやかに人を包むこの未踏の渓谷の／約束の地を求める我ら／その疼いた問いかけに／灼熱の太陽は語ることをしない」（「箜篌の夢」）。

旧約が踏まえられているのだろうが、「懐かしさ」が「未踏」と結びつけられていることが、「約束の地」の喚起よりもさらに意味深い徴であるように思える。

「祈りましょう／／再生し、またいつの日か／この存在の記憶にめぐりあえるように」（「サッフォー」）。

サッフォーを訪ね、そこで生きた「存在の記憶」を、未来の「いつの日か」に蘇らせること。フランス語の文法用語で言えば、まさに前未来のような、あらまほしき展望である。

フランス語といえば、大鐘さんはフロベールの研究者であり、ヘロディアス―サロメの

神話伝説の形成をも追っているという。文学においてそれは妖しいロマネスクの花を咲かせたわけだが、同時にマラルメ的な主題をも引き出している。「不妊の女の冷ややかな威厳」（ボードレール）に似せた、不毛と紙一重の、純粋な言語空間への渇望だ。大鐘敦子の詩は、ロマネスクへの傾きとポエジーへの志向と、そのあいだで美しくバランスをとっている。そう、

「膝の上に／開かれた手帳には／白い文字が／いつまでも踊り続けるだろう」(「丘の上」)

その文字のように。

詩人・文芸評論家

「時の大扉」～未知の至福の空間～によせて

大久保眞由美

未知の幸福感に出会いました。時空を超えたというのが月並みな表現だとすれば、この詩は何を超えているのでしょうか？
季節、神殿、集う人々、チュニク、太陽の光... 何の制約もなく集い、大地や光と戯れ、時のない永遠の中に在り続けるような。

これは私が味わったことのない至福感です。遺跡の映像もまさにその「大扉」です。これを開いていくと、あの天空の青の中に吸収されていくような。

フランス語も流れるように、この自由な超越された空間を語ります。on, je, nous の人称も独特の味わいをもち、神も文明も見渡す言語を感じさせます。

この一編はまさに今私たちのいる時空から、一瞬飛び立たせてくれます。
救われた気持ちです。

関東学院大学講師

郷原佳以

最新の *Rêves de printemps-été* は、「生暖かい風」や「穏やかな凪」といった夏の大気のなかに響く音色や声、喧噪と同時に静寂、そして何も語らず、何も応えてくれないけれども彼方にあって見守っている何か、といった、孤独と超越的あるいは原初的なものへの祈りのようなものを感じました。「夏の日」の、「雨のように降り注ぐ」猛烈で速い「妄想の糾弾」と、早熟に「さっくりと開」く「淡い石榴」のイメージは特に鮮烈で、峻厳さ、激しさと柔らかさ、甘美さのコンビネーションで特に好きな詩でした。
饒舌に語らない峻厳なものと、それへの祈りのようなものを感じました。

東京大学准教授　フランス文学

山上浩嗣

大鐘敦子の詩は、規則的な律動としばしば官能的なイメージをそなえ、ときに訪れた異国の風景（*Labyrinthe blanc*）を、ときに幻想の風景（*Un jour d'été*）を描き出し、その情景に、遠い国（*Rêve de Kugo*）、遠い過去（*La forêt de Némi*）、遠い未来（*Le portail du Temps*）という彼方への憧憬を結びつける。私はこれらの作品に、愛と祈りなしでは生きられない人間に対する無上の慈しみを感じ取る。

大阪大学教授　フランス文学

石川大智

大鐘教授によってここに紡がれた言葉たちは、今ここには存在しない何かを志向しながら、読み手をどこか懐かしくもある異郷へとゆっくりと誘ってくれる。かつてウォルター・ペイターは『プラトンとプラトニズム』の最終章で、ヘラクレイトスとベーコンが好んだ「乾いた光」という表現に言及しつつ、理想の魂が放つそのような美を愛せと説いた。大鐘教授の詩行から感じられるのも、晴朗さを帯びた古代ギリシア的な美である。ある時には鮮やかな色彩のコントラストの中を、またある時には半透明のイメージの流れの中を、揺らめく炎や海の碧さの中を、あるいはいつかの薄明や束の間の眠りの中を、すり抜けては光度を増す、乾いた美の魅力とでも呼べるものが私たちに心地よく迫ってくる。

慶應義塾大学理工学部　助教
https://k-ris.keio.ac.jp/html/100015284_en.html

ほうとした心の古代―どこでもない、静かな世界へ

なかにしけふこ

大鐘敦子の連作「春から夏へ　未定稿」では、晴朗な古代のヴィジョンが喚起される。

ジェイムズ・ジョージ・フレイザー（1854–1941）『金枝篇』に言及される、王殺しと王権の交代の神話の起源の地「ネミの森」。詩のなかの暗い森に王が立ち上がるとき、月神ディアナの聖域に立つ常若の女が世界の生々流転をみつめている。サッフォーと女性作中主体の「私」あるいは読み手の「私」が、やわらかな心とからだを通わせる喜びのヴィジョン。それはサッフォーに恋したファオンがついに気付かずとおりすぎていったものかもしれない。森の奥に人知れず開く石榴の花。時の扉のむこうにひらく友情の夢。母親にかつて連れられて行った聖域で少女が見るはるかな海の夢。それらが八重咲きの芍薬の花がひらくように開示される。

「三田の文人」として日本語詩の世界に大きな影響を与えた慶應義塾大学出身の詩人たちのなかには、いま、ここにあるものとはるかなものの出会いを歌うコスモポリタン詩人たちがいる。英文学を学ぶために 1920 年代に英国に留学して T. S. エリオットらの詩に出会い、日本語のモダニズム詩を確立した西脇順三郎（1894-1982）もそのひとりだ。

西脇の詩にも、大鐘の詩にも、どこにもない晴朗な古代への憧れと、日々の散歩にそぞろ歩くフラヌールの心がある。ヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマン流の壮麗で雄々しい、真っ白に洗われた古代とも、古代のラテン語やギリシア語の抒情詩を日本語の艶麗な雅俗混淆体にうつす粋人古典学者・呉茂一（1897-1977）の古代とも、ひと味違う世界だ。西脇は学業を終えてからはフロベールを耽読し、大鐘はフロベール研究のかたわら制作を行ってきた。大鐘の連作「森の囁き」のタイトルポエムは『三田文学』の復刊十周年記念特集号(1995)に掲載された。「三田の文人」のコスモポリタンの縁であろう。

京都に生まれ育った大鐘の詩がフランス語になるとき、そこには俳味が加わる。与謝蕪村や松尾芭蕉が見た自然のなかのわびさびが不思議とたちあがってくる。それが、遠いものと近いものとの出会いを通して、孤独な旅の果てに見る安らかな喜びや、憧れとよき心によって結ばれる幸福な世界のヴィジョンにつながる。

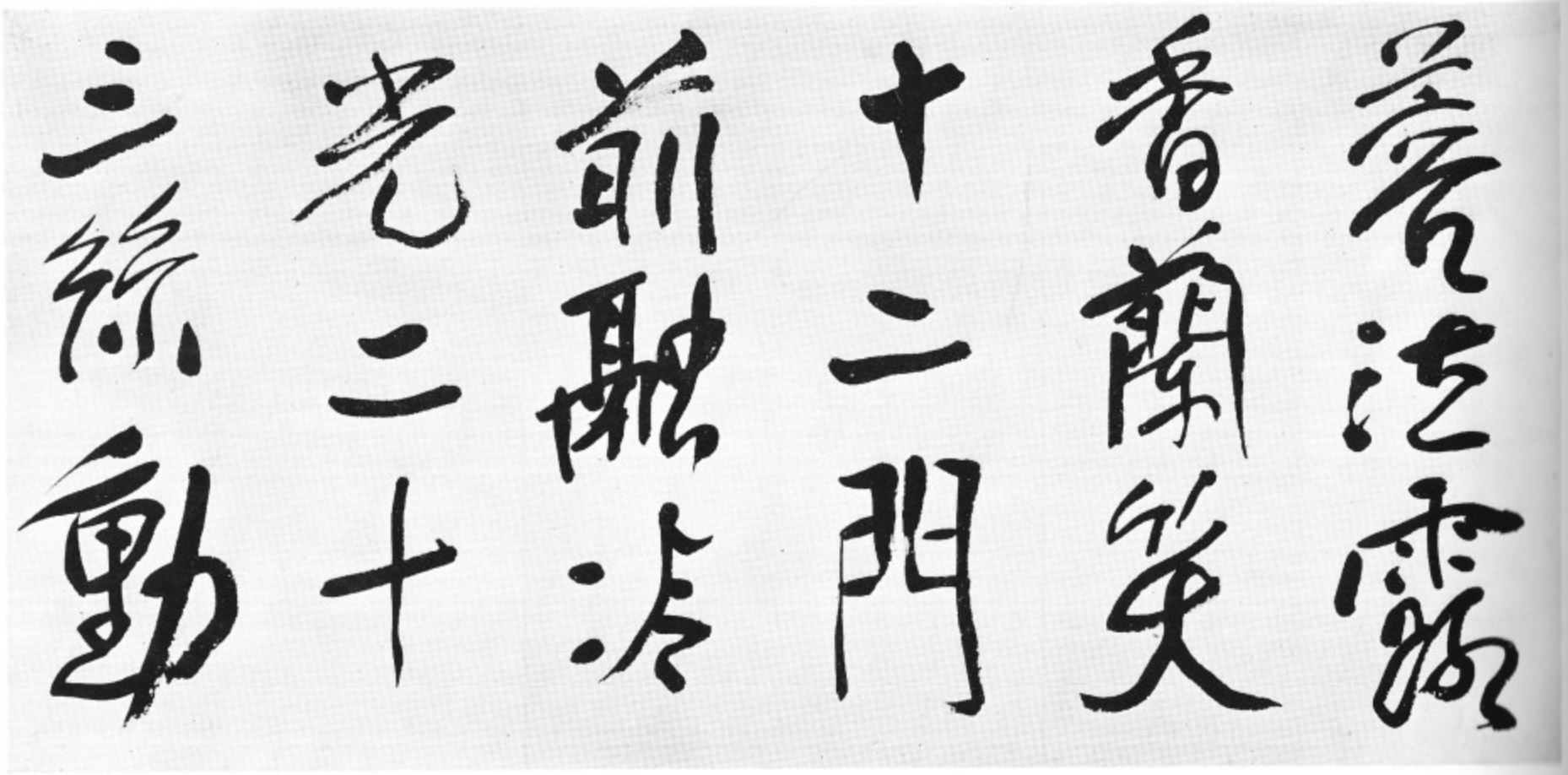
約束の地を求める旅人に吹き付ける砂漠の風に、箜篌が鳴る。西脇の『Ambarvalia』「Le Monde Ancien」の一篇、「雨」では、雨は竪琴の調べのように、詩人の目を濡らす官能的な女神となってあらわれる。西脇の雨の女神とは対照的に、大鐘の描く砂漠の風は非人情の境地に旅人をそっと置いたまま、孤独の向こうに開かれるなつかしい緑の楽園を静かにしめす。そして白い迷宮の果てに海が、時の扉がひらくとき、旅人はよき心の人々が太古の喜ばしい記憶を分かち合い、手を取り合う夢をみる。そこはどこでもない、静かで晴れやかな世界だ。

なかにしけふこ（中西恭子）詩人・宗教史家。東京大学大学院人文社会系研究科研究員、津

田塾大学ほか非常勤講師。専門は古代末期地中海世界の諸宗教とその受容史、新プラトン主義の系譜、日本語詩歌における古代表象・宗教表象。著書に『ユリアヌスの信仰世界　万華鏡のなかの哲人皇帝』（慶應義塾大学出版会、2016 年）、詩集に『The Illuminated Park 閃光の庭(Le parc illuminé) 』（書肆山田、2009 年、第 15 回中原中也賞最終候補作品）。

吳孫蜀
桐張高
秋空山
凝雲翔
不流泛
娥啼竹

素女怨
青溪中
國彈箜
篌崑山
玉碎鳳
凰叫芙


蕾注露
香蘭笑
十二門
前聽法
光二十
三旋動

紫皇女
媧煉石
補天裏
石破天
驚逗秋
雨夢入

神山教
神嫗老
兎跳波
瘦蛟舞
吴質不
眠倚桂

樹霧脚
斜飛濕
寒兎

乙酉十月中浣
京都嵯峨次於
山草園書
李白昌谷篇
筰引北越
飛鳴道人
會翔